筑紫女学園大学リポジト

『東方紀行』における都市(8)：カイロの迷路

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 間瀬, 玲子, MASE, Reiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/714

『東方紀行』における都市(8)
── カイロの迷路 ──

間　瀬　玲　子

Les villes dans le *Voyage en Orient* (8)
— Le labyrinthe du Caire —

Reiko MASE

I. 序

ジェラール・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval は約1年をかけて行なった東方旅行においてエジプトのカイロを訪れている。1843年2月7日にカイロに到着し，当初の予定よりも長く滞在し，同年5月2日にカイロをたち，シリアに向かう。

カイロにおいては東方旅行の同行者ジョゼフ・ド・フォンフリード Joseph de Fonfride(1)とともにフランス系ホテルに宿泊するが，後に一軒家を借りて生活する。カイロ滞在中にこの町を詳細に観察し，体験し，時には大きな失望を感じている。彼が見たカイロはどのような町であったのか，そして『東方紀行』においてどのようにカイロを再構築したのかを論じてみたいと思う。

II. カイロの町全体の概観

『東方紀行』の話者「私」はカイロの印象として，まず第一に町全体が醸し出す秘密めいた雰囲気を指摘する。

La ville elle-même, comme ses habitantes, ne dévoile que peu à peu

ses retraites les plus ombragées, ses intérieurs les plus charmants. (2)

町そのものが，町の住民のように，最も影になった隠れ家，最も魅力的な内部を少しずつしか明かしてくれない。

カイロの町は『東方紀行』の話者「私」にとって秘密のベールに包まれた都市である。この印象はネルヴァル独特の感性ではないかもしれない。「私」はカイロの錯綜した町の中に入り込む。

Et je me plongeais dans l'inextricable réseau des rues étroites et poudreuses, à travers la foule en haillons, l'encombrement des chiens, des chameaux et des ânes, aux approches du soir dont l'ombre descend vite, grâce à la poussière qui ternit le ciel et à la hauteur des maisons. (3)

そして私は狭く埃っぽい道の入り組んで抜け出せない網の目に入り込み，ぼろを着た群集や，犬や駱駝，驢馬がひしめきあう中に入った。夜が近づき，空を曇らせる埃や，家々の高さのせいで，すぐに暗闇が落ちてくる。

ジャン＝ピエール・リシャールJean-Pierre Richardは『詩と深さ』*Poésie et profondeur*でネルヴァルのこの一節に対し，《La recherche se poursuit ici en un véritable cauchemar d'étouffement et de pulvérulence.》(4)（訳：ここでは探求は息もつまりそうで，埃まみれの真の悪夢の状態で続けられる。）との解釈を行なっている。しかしネルヴァルの筆致は，カイロで経験したことを作品として発表するまでに約3年の歳月をかけているということもあり，息もつまる埃だらけの探求とは程遠いものである。『東方紀行』のエジプトに関する部分が初めて公開されたのは，『両世界評論』誌 *Revue des Deux Mondes* 1846年5月1日号，7月1日号，9月15日号，12月15日号である。(5) 彼

が何年もの間原稿を書き続け，雑誌や新聞に部分的に発表し，最終的に『東方紀行』増補改定第三版を出したのは1851年のことである。生々しい思い出は風化し，彼の経験，彼の記憶は変形し，文学作品で得た記憶と重なりあい，昇華したはずである。

ネルヴァルは『東方紀行』において冷静にカイロの都市空間を再現してみせる。その中でも顕著なのが城壁である。その堅固な構造を見てみよう。

> Chaque quartier, entouré de murs à créneaux, fermé de lourdes portes comme au Moyen Âge, conserve encore la physionomie qu'il avait sans doute à l'époque de Saladin …(6)

> 各々の地区は狭間のある城壁に囲まれ，中世の頃のように重い門で閉められ，おそらくはサラディーンの時代の様相を今でも保っている。

サラディーンの時代とは12世紀末のことである。ジャック＝ユレ Jacques Huréは彼の『東方紀行』校訂版の中で《Salâh al-dîn, d'origine kurde, régna au Caire de 1169 à 1193. Il fonda la dynastie des Ayyoubides.》(7)（訳：サラディーンはクルドの出身で，1169年から1193年までカイロを支配した。彼がアイユーブ朝をつくった。）と書いている。またガリマール社のガイドブックには次のように詳細に書かれている。

> Plus tard, la reprise en main sunnite, conduite par Saladin (Salah el-Din el-Ayyoubi)(1138－1193), n'efface pas ces richesses. C'est lui qui fait construire la formidable citadelle qui domine Le Caire, à la jointure des villes tulunides et fatimides. C'est aussi lui qui favorise le développement des grands collèges religieux que l'on nomme *madrasa*.(8)

後に，スンニー派（予言者の言行録スンナを信奉するイスラム教の本流）の手に戻り，サラディーン（サラハ・エッディーン・エル・アイユーブ）(1138－1193) に率いられた時もこの豊かさは消えていない。トゥールン朝 (868－905) とファーティマ朝 (969－1169) のそれぞれの町の境界にカイロを見下ろすすばらしいシタデル（城塞）を建設させたのはサラディーンである。また「マドラサ」と呼ばれる宗教学校の発展を奨励したのも彼である。

ネルヴァルが 1843 年のカイロの町を見てサラディーンの時代を思い起こしたのは，シタデル（城塞）を考えたからであろう。810 年にハティム・イブン・ハルタマがカイロ市内のケベル・モカッタムの丘に娯楽の小邸を建てた。歴代の指導者はシタデルに関心を持ち，サラディーンは 1176 年からここを城塞化した。城壁に囲まれた 3 部分があり，下の城壁エル・アザブ，北の城壁エル・アンキシャリア，南の城壁シタデルつまりエル・カラアから成っている。(9) このような堅固な城塞はネルヴァルが最も興味を持つ建築物である。ネルヴァルが『東方紀行』に挿入した小説「カリフ・ハーキムの物語」においてカリフが通う天体の観測所がある場所がシタデルのあるモカッタムである。ネルヴァルがシタデルを強く意識していたと考える根拠はここにある。すでに引用したジャン＝ピエール・リシャールが『詩と深さ』において次のような興味深い考察を述べている。

Lever le voile, ce serait franchir le *seuil* de l'autre : geste violemment émouvant quand on se souvient à quel point Nerval fut toujours obsédé par les barrières, par les portes fermées, par toutes les expressions concrètes de la limite. (10)

ヴェールをあげることは即ち別社会への「敷居」をまたぐことであろう。これはネルヴァルがいつも柵とか閉じた門，境界の具体的なすべての表現によってどんなに強迫観念に取り付かれていたかを思い出すとき，激しく心を

打つ動作である。

ネルヴァルがシタデルで注目した「狭間のある城壁」「重い門で閉められること」はまさに境界を表す具体的な表現である。ネルヴァルが最も力を込めて書いたといっても間違いではないと思われる。

さてここでネルヴァルが描いたカイロの町の構造をもう少し具体的に見ていこう。まず町全体が多くの地区で分割されていることを指摘してみよう。

Toute la ville est partagée en cinquante-trois quartiers entourés de murailles, dont plusieurs appartiennent aux nations cophte, grecque, turque, juive et française. (11)

町全体は53の地区にわかれ，それぞれの地区が城壁で囲まれている。それらの幾つかはコプト人，ギリシア人，トルコ人，ユダヤ人，フランス人の地区になっている。

1840年代のカイロは多民族が居住する都市であった。多くの地区がそれぞれ別の地区に住み，各々の生活を維持していた。城壁が各々の地区の境界を成していた。しかもその町には道路表示すらなかった。

Au Caire, les rues n'ont pas d'écriteaux, les maisons pas de numéros, et chaque quartier, ceint de murs, est en lui-même un labyrinthe des plus complets. (12)

カイロでは表示もなく，家々には番地もなく，各々の地区はそれ自体が城壁に囲まれて，最も完全な迷路の一つである。

ネルヴァルにとってカイロこそが最も理想とする都市の姿なのである。それは

まず城壁に囲まれ，次に標識もないような完璧な迷路をなしているからである。それ故埃に満ちた町にはヴェールに包まれた謎の雰囲気がたちこめている。これはネルヴァル文学世界の創造に大きな貢献をなしたと言えよう。次の章では，カイロの具体的な建造物を見ていきたいと考える。

III．ヨーロッパ人地区のホテル

ネルヴァルは『東方紀行』においてフランス系のホテルを描いている。まずその具体的な描写を引用してみよう。

> L'hôtel Domergue est situé au fond d'une impasse qui donne dans la principale rue du quartier franc ; c'est, après tout, un hôtel fort convenable et fort bien tenu. Les bâtiments entourent à l'intérieur une cour carrée peinte à la chaux, couverte d'un léger treillage où s'entrelace la vigne … (13)

> ドメルグホテルはヨーロッパ人地区の主要道路に通じている袋小路の奥に位置している。結局のところ，とても居心地がよく，手入れの行き届いたホテルである。建物の内側には石灰で塗った四角い中庭があり，軽い感じの格子組みで覆われている。そこでは葡萄の蔦が絡み合っている。

ホテルの中にある格子組はネルヴァル文学世界の中で比較的頻繁に描かれている光景である。(14) その中で葡萄の蔦がからまる格子組が描かれているのは『シルヴィ』*Sylvie* の第6章オチス Othys である。

> La tante de Sylvie habitait une petite chaumière bâtie en pierres de grès inégales que revêtaient des treillages de houblon et de vigne vierge … (15)

シルヴィの伯母さんは不揃いな砂岩の石で出来た小さな茅葺の家に住んでいた。ホップや野葡萄の格子組みがその家を覆っていた。

ネルヴァルの文学世界に頻出する treillage（格子組み）とは《Assemblage de lattes, d'échalas posés parallèllement ou croisés, dans un plan vertical》(16)（訳：鉛直面で平行または交差して置かれた横木，添え木の組み合わせ）である。vigne vierge は《nom familier des ampélopsis (*Ampélidées*), plantes décoratives qui s'accrochent par des vrilles ou des crampons, et servent à orner les murs, les tonnelles》(17)（訳：野葡萄属の俗名で，巻きひげや付着根でくっつき，壁や園亭の装飾をする植物）を意味する。『東方紀行』に登場するカイロのヨーロッパ系ホテルの中庭の装飾とパリ近郊を舞台とした『シルヴィ』に登場する田舎家の装飾が同じであるのは一見すると不思議なことに思える。しかしネルヴァルの創作した世界では時を超え，場所を越えて彼の想像力がつくり出す強烈なイメージがいくつかある。《格子組み》と《野葡萄》はその一部をなしている。この作品内で描かれているエジプトに関する部分は，日程に関してはネルヴァルの東方旅行に沿っている。(18) その証として彼が父に対して 1843 年 2 月 14 日にカイロから出した書簡の一節を引用してみよう。

Nous avons commencé par nous loger à l'hôtel français, mais il fallait payer 7 fr. 50 par jour … (19)

私たちはまず初めにフランス系のホテルに泊まりました。一日 7 フラン 50 を払わなくはなりませんでした。

ネルヴァルが父に対して書いた手紙は，父に対して自分のことをよく見せよう，父から作家として認めてもらおうという気持ちのせいで，多少誇張した箇所があることは否定できない。しかしこのフランス系ホテルに関しては上記の引用

のように，その宿泊費が高いことしか言及しておらず，他には何の描写もない。するとすでに引用した『東方紀行』で描かれたこのホテルの中庭の情景は，ネルヴァルの想像力の産物であるという可能性もある。このホテルがどのような場所にあるのかについて，彼は次のように書いている。

> … je traversai la place de l'Esbekieh, pour me rendre à l'hôtel Domergue. C'est comme on sait, un vaste champ situé entre l'enceinte de la ville et la première ligne des maisons du quartier cophte et du quartier franc. Il y a là beaucoup de palais et d'hôtels splendides. (20)

> 私はエズベキヤ広場を通り抜け，ドメルグホテルに行った。それは人も知るとおり，町の城壁と，コプト人街及びヨーロッパ人街の最初の家並の間に位置する大きな広場である。豪邸や素晴らしいホテルが沢山ある。

コプトとはエジプトにおけるキリスト教の一派である。ガリマール社のガイドブックによると，《Selon la tradition, c'est vers l'an 40 que l'apôtre Marc évangélise l'Egypte.》(21)（訳：伝承によると使徒マルコがエジプトに伝道したのは西暦40年頃である。）と書かれている。9世紀までエジプトではキリスト教徒が過半数を占めていたが，12世紀から14世紀にイスラム教徒が90％になった。ネルヴァルにとってコプト人街とヨーロッパ人街は容易に接触しうる界隈であろう。それではそのドメルグホテルの内部を見てみよう。

> On peut compléter le tableau du séjour de l'hôtel français en se représentant un piano du premier étage et un billard au rez-de-chaussée, et se dire qu'autant vaudrait n'être point parti de Marseille. (22)

二階にピアノ，一階にビリヤードを思い描きながら，このフランス系ホテルの滞在の光景の不足分を補い，マルセイユから出発しなかったのと同じだと思う。

実際の東方旅行はフランスのマルセイユを経由して行なわれた。だからマルセイユが言及されるのは不思議なことではない。『東方紀行』においてはマルセイユは通過していないことになっている。(23) ここに上記の引用の矛盾点が指摘できるが，その点を度外視してマルセイユがネルヴァルにとって重要であることを指摘してみよう。例えばカイロのヨーロッパ地区の大商店街の描写である。

Je ne cite point Marseille avec la France, car dans le Levant on ne tarde pas à s'apercevoir que les Marseillais forment une nation à part ; ceci soit dit dans le sens le plus favorable d'ailleurs. (24)

私はフランスと一緒にしてマルセイユを引用することはしない。というのは東方の国々では，マルセイユ人は別の国民を形成していることにすぐ気づくからである。その上良い意味で言われている。

商店街にはヨーロッパの中のイギリス，ドイツ，フランスからやってきた人々が商売をしている。その中にマルセイユ人だけが特別扱いされて描かれている。ネルヴァルが東方旅行においてマルセイユに到着したのは 1842 年 12 月 28 日である。その後 1843 年 1 月 1 日に船でマルセイユを出発したとされる。東方旅行を終えて 1843 年 12 月初旬にマルセイユに到着し，滞在している。(25) マルセイユに滞在した期間にそこに居住する人々や町の様子などを観察し，その結果ドメルグホテルを描写する時に，『東方紀行』の中では登場人物たちが通過していないはずのマルセイユを言及してしまうことになる。(26)

すでに述べたようにネルヴァルが最初に宿泊したホテルはフランス人系ホテルである。その光景にはフランスのイル・ド・フランスの小さな村の光景やマ

ルセイユの姿が投影されて描かれている。しかしネルヴァルは故郷の姿と酷似したホテルに満足したわけではない。

Ⅳ．カイロの邸宅

『東方紀行』の話者「私」は，フランス系のホテルの宿泊費の高さに辟易し，一軒家を借りることにした。現地通訳のアブド・アッラーがまず紹介してくれたのはコプト人街やギリシャ人街の物件である。

> Abdallah m'en a fait voir plusieurs dans le quartier cophte et dans le quartier grec. C'étaient des salles magnifiquement décorées, avec des pavés de marbre et des fontaines, des galeries et des escaliers comme dans les palais de Gênes ou de Venise, des cours entourées de colonnes et des jardins ombragés d'arbres précieux …(27)

> アブド・アッラーはコプト人街やギリシャ人街のいくつかの家を私に見させてくれた。部屋は見事に装飾されて，大理石張りの床，噴水，回廊，階段はまるでジェノヴァやヴェネツィアの大邸宅のようだ。中庭は列柱で囲まれ，庭は貴重な木々が影を落としている。

カイロの邸宅をイタリアのジェノバやヴェネツィアの邸宅と比較するのは一見不思議に思えるが，木島安史氏は「商館建築に限らず，邸宅の形を追ってみても，類似点がカイロとヴェネツィアの間に感じられます。」との指摘をしている。(28) 年譜上ではネルヴァルはジェノバとヴェネツィアには旅行を行なっていない。すると絵画や図版でこの地中海都市の姿を見たと考えるほうが自然であろう。(29) 彼はカイロにある橋にも注目している。

> Nous rentrâmes en suivant la rue *Hazanieh*, qui nous conduisit à

celle qui sépare le quartier franc du quartier juif, et qui longe le Calish, traversé de loin en loin de ponts vénitiens d'une seule arche. (30)

ヨーロッパ人街とユダヤ人街を分けるハザニエ通りを通って帰った。これはカリッシュ運河沿いであり，運河にはヴェネツィア風のアーチが一つしかない橋が間をおいてかかっている。

このように邸宅の内部の様子にはジェノバとヴェネツィア，屋外の橋のアーチにヴェネツィアの影響をネルヴァルは敏感に感じとっている。しかしネルヴァルが実際に住んだのはイタリアの諸都市の邸宅との類似点を見いだせるような大邸宅ではない。

Ma maison est située dans une rue du quartier cophte, qui conduit à la porte de la ville correspondant aux allées de Choubrah. (31)

私の家はコプト人地区の通りに面していて，通りは町の門まで続き，シュブラー地区の並木通りにつながっている。

ネルヴァルは 1843 年 2 月 14 日付けの父宛ての書簡に《Nous avons trouvé une maison complète dans le quartier cophte, pour 1 fr. 25 par jour chacun.》(32)（訳：私たちはコプト人街に一日につき 1 フラン 25 ですべて整った家を借りた。）と書いている。父宛ての手紙では家の内部の様子を何も書いていない。しかしネルヴァルは身分相応の家を借り，それを『東方紀行』でも同様に描いている。現地通訳が最初に見せてくれた大邸宅とは全く違う。作品内で言及されているシュブラー地区についてプレイヤッド版の編者は《Le quartier de Choubrah (…) s'étend au nord de la gare. (…) c'était au temps de Nerval《un quartier résidentiel et un lieu de plaisance》

(d'après le Guide bleu *Égypte*)》(33)（訳：シュブラー地区は駅の北側に広がる。ネルヴァルの時代には住宅専用の地区であり，レジャー地区であった。ブルーガイド『エジプト』による。）という注をつけている。ガリマール社のガイドブックには《Ce dense faubourg(…) s'étend le long de ce qui était au début du XIXe siècle l'une des rares voies carrossables du Caire : la promenade de Choubra.》(34)（訳：この密集した地区（中略）は，19世紀には数少ないカイロから馬車で来られる道“シュブラ街道”に沿って広がっている。）と書かれている。このようにカイロを代表するような並木道，しかも馬も通る数少ない道にも通じる地区にネルヴァルは居住し，それを『東方紀行』の中でも描いた。最初に登場するような大邸宅ではないが，住宅専用地区の中に住みよい空間を見つけて居住した。そこは決してヨーロッパ人専用の地区ではない。彼がカイロの中に入り込み，そして探索する拠点としての住空間として最適の地区を選んだと言えるのではないであろうか。

V．過去の町の再構築

以上の章においてカイロの町の建造物の一部であるフランス系ホテルと家屋を検証した。ネルヴァルはこれらの建造物が建てられているカイロの町を歴史上のあらゆる時代の層が重なった町ととらえている。

> C'est pourtant la seule ville orientale où l'on puisse retrouver les couches bien distinctes de plusieurs âges historiques. Ni Bagdad, ni Damas, ni Constantinople n'ont gardé de tels sujets d'études et de réflexions. (35)

> カイロは歴史上の幾つかの時代のはっきりと異なる層を見分けることのできる唯一の町である。バグダッド，ダマスカス，コンスタンチノープルもこれほどの研究と思索の主題を残していない。

ネルヴァルがカイロに見出したのは，いくつかの時代の異なる層である。それが残され，重なりあう姿は他の中近東の都市では見られない。ジャン＝ピエール・リシャールは，《Tout ayant déjà été vécu dans l'imagination, la mémoire ou la littérature, chaque pays connu ne peut que se réduire à son *poncif*. A quoi bon dès lors partir pour l'Égypte ou pour la Turquie ?》(36)（訳：何もかも，すでに想像力，記憶，または文学の中で経験されてしまっているので，おのおのの有名な国はその紋切り型の表現に縮小するしかない。そこで，エジプトに出発しようが，トルコに出発しようが何になろうか。）とネルヴァルの東方旅行を評している。事実ネルヴァルが友人テオフィル・ゴーチエ Théophile Gautier に 1843 年 5 月 2 日（推定）カイロから出した手紙には次のように書かれている。

> La ville des Milles et Une Nuits est un peu dégradée, un peu poudreuse, pourtant il y a encore quelque chose à en faire ; ce qui est triste, c'est la pauvreté de la population. (37)

> 『千夜一夜物語』の町は，少し悪化し，また少し埃っぽいが，まだここからはつくり出すものはある。悲しいこと，それは民衆の貧困である。

ネルヴァルは東方旅行の前に中近東に関する研究を重ね，ある種のイメージができあがっていたと思われる。そしてカイロの町で最初に感じたのは，埃っぽさと長い歴史の残骸である。それを顕著に表している文章を見てみよう。

> Qu'espérer de ce labyrinthe confus, grand peut-être comme Paris ou Rome, de ces palais et de ces mosquées que l'on compte par milliers ? (38)

> 恐らくはパリまたはローマのような広さの，この入り組んだ迷路，何千と

いうこれらの宮殿やモスクに何を期待しようか？

昔は素晴らしかったかもしれない迷路，宮殿，モスクも今はあたかも亡霊が住んでいるようなさびれた姿をさらしているのが，ネルヴァルが見たカイロの姿である。しかし『東方紀行』から読み取れるのは，カイロの過去の偉大な歴史の残骸とも言えるような無残な姿だけではない。ネルヴァルの分身である話者「私」がカイロの町を軽やかに闊歩する姿も生き生きと描かれている。カイロを去る場面での次の文章がネルヴァルの気持ちを代弁しているのではないであろうか？

Je quitte avec regret cette vieille cité du Caire, où j'ai retrouvé les dernières traces du génie arabe, et qui n'a pas menti aux idées que je m'en étais formées d'après les récits et les traditions de l'Orient. Je l'avais vue tant de fois dans les rêves de la jeunesse, qu'il me semblait y avoir séjourné dans je ne sais quel temps ; je reconstruisais mon Caire d'autrefois au milieu des quartiers déserts ou des mosquées croulantes ! (39)

古きカイロの町を名残惜しい気持ちで去ることになった。そこではアラブの天才の最後の残骸を見ることができたし，オリエントの話や伝承をもとに私が作ってきた考えを裏切らなかった。私は若い頃夢の中で何度も見た，いつのころかわからないが住んだことがあるような気がした。人気のない地区や崩れかかったモスクのただ中でかつての私のカイロを再構築していたのだ。

ネルヴァルは彼の想像力の中で旅行前にカイロの町を作り出し，東方旅行を経験してカイロを実体験した。そして旅行後にカイロの町を再構築した。その手法は，作品内でウィーンの町を再構築する時もパリの町を再構築する時もいかされることになる。つまり彼は周到な準備，たゆまない研究の後に都市の探索

を試み，その後作品内で彼が読書経験の中で得た知識に基づく都市像と実体験で経験した都市像が混合し，彼独自の各都市の都市像が文学世界の中で作りだされるのである。

Ⅵ．結びに代えて

以上のようにネルヴァルは，エジプトの都市カイロを訪問し，その都市構造や町並み，そして家々の観察を行なった。本論文ではカイロの町の概観，フランス系ホテル，そしてカイロ市内の邸宅と居住した家の描写を分析した。ネルヴァルは，東方旅行前に周到な準備を行い，カイロについてのある種の知識を吸収し，実際の旅行を実行した。カイロで見たものは過去の様々な時代の残骸が重なりあい，貧困と埃っぽさだけが目立つ町であった。しかし彼はそのようなことにめげず，町や家々を探索し，後に過去のカイロの町を想像の中で再構築した。その根気強い作業は，その後のネルヴァル文学世界を大きく発展させるきっかけとなったと考えられる。

注

(1) ネルヴァルは東方旅行を行なうに際し，ジョゼフ・ド・フォンフリード Joseph de Fonfride を同行している。彼は 1838 年 11 月 10 日から 1840 年 9 月 26 日まで『コルセール』紙 *Corsaire* の株主であり編集者のひとりであったと言われている。(Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome II, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Jacques Bony, Max Milner et Jean Ziegler et avec le concours de Michel Brix et d'Antonia Fonyi, Paris, Gallimard, coll.《Bibliothèque de la Pléiade》, 1984, p. 1371 による。以下この巻を *OECII* と略す。)

(2) *OECII*, p.262. ネルヴァルの『東方紀行』を訳す際，『ネルヴァル全集 III 東方の幻』東京，筑摩書房，1998 年に収録された野崎歓・橋本綱 訳『東方紀行』とG・ド・ネルヴァル著，篠田知和基 訳『東方の旅 ― 上』(世界幻想文

学大系第31巻A）東京，国書刊行会，昭和59年と『東方の旅 — 下』（世界幻想文学大系第31巻B）東京，国書刊行会，昭和59年を参考にした。

(3) *OECII*, p.262.

(4) Jean-Pierre Richard, *Poésie et profondeur*, Paris, Éditions du Seuil, 1955, p.24. 日本語に翻訳する際，J＝P・リシャール　著，有田忠郎　訳『詩と深さ』東京，思潮社，1995年（新装版）を参考にした。

(5) *OECII*, pp.1388 - 1389を参考にした。なおエジプトのピラミッドに関する箇所は，『ナシオナル』紙 *Le National* 1850年3月7，8，9，10，14日号に発表された（*OECII*, p.1497による）。

(6) *OECII*, p.262.

(7) Gérard de Nerval, *Voyage en Orient*, volume Ⅰ, présentation et notes Jacques Huré, Paris, Imprimerie Nationale, 1997, p.450.

(8) *Égypte*, Paris, Éditions Nouveaux-Loisirs, coll.《Guides Gallimard》, 2000, p.67. 本書を訳す際，『「旅する21世紀ブック」 望遠郷　14　エジプト』京都，同朋舎出版，1997年，p. 67（本論文で引用した版よりも古い1994年版を翻訳した本）を参考にした。

(9) *Égypte*, p.304 - 307を参考にした。エリック・ビュフトーÉric Buffetaudはネルヴァルに関する図版集の中で，1845年に撮影された「シタデルからのカイロ」と題する銀板写真の複製について次のような解説を書いている。《Cette extraordinaire vue du Caire, prise de la Citadelle, forteresse construite en 1176 par Saladin sur la colline du Mokattam (où le calife Hakem avait son observatoire, *Voyage en Orient, Druses et Maronites*), nous montre le quartier islamique et ses mosquées mamelouks, tels que Nerval les a connus.》(Mairie de Paris, *Exposition Gérard de Nerval*, choix des documents et rédaction du catalogue par Éric Buffetaud, Bibliothèque historique de la ville de Paris, 1996, pp.78 - 79. 訳：モカッタムの丘にサラディーンが1176年に作った城塞，シタデルから撮影したカイロのこの素晴らしい眺め。この丘にはカリフ・ハケムが彼の天体観測所を作った（『東方紀行』「ドルーズ派とマロン派」）が，この眺めは私たちにネルヴァルが知ったようなイスラム地区とマムルーク朝のモスクを示している。）この銀板写真から見てとれるのは，堅固な家々が密集したカイロの町の様子である。

また『東方紀行』の教科書版に掲載された「カイロの町，シタデルへのパノラマ」と題する写真（ロジェ＝ヴィオレRoger-Viollet撮影，撮影年代は記載されていない）には，シタデル（城塞）が小高い丘に聳え立つのをはっきりと見ることができる。(Gérard de Nerval, *Voyage en Orient*, extraits présentés

par Henry Bouillier, préface de Salah Stétié, Paris, Didier, 1974, p.22) また別の書物に載せられた「スルタン・ハッサン・モスクから見たカイロのシタデル」の現代の姿を見ても，このシタデルがネルヴァルにとって強烈な印象を与えた建築物であることがすぐ理解できる。(*Le Grand Guide de l'Égypte*, Paris, Gallimard, coll.《Bibliothèque du Voyageur》, 1988, p.160.) スルタン・ハッサン・モスクはサラディーン広場をはさんで，シタデルからすぐ近くにある。1356年～63年に建立された巨大なモスクであり，学校としても活動していた。

(10) Jean-Pierre Richard, *Poésie et profondeur*, p.22.

(11) *OECII*, p.284.

(12) *OECII*, p.287.

(13) *OECII*, p.271.

(14) 間瀬玲子「ジェラール・ド・ネルヴァルの『東方紀行』におけるウィーンの町」『筑紫女学園短期大学紀要』第28号（1993年1月），pp.33 - 54において，treillage（格子組み）と関連のあるtreille（葡萄棚）について論じた。ネルヴァル文学世界の中では両者は区別して考えたほうがよいと思われる。

(15) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome III, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Jacques Bony, Michel Brix, Lieven d'Hulst, Vincenette Pichois, Jean-Luc Steinmetz, Jean Ziegler et le concours d'Antonia Fonyi, Paris, Gallimard, coll.《Bibliothèque de la Pléiade》, 1993, p.549. この作品を日本語に翻訳する際，『ネルヴァル全集　V　土地の精霊』東京，筑摩書房，1997年に収録された中村真一郎・入沢康夫訳『火の娘たち』を参考にした。

(16) *Le Petit Robert 1*, Paris, Le Robert, 1982, p.2012.

(17) *Le Petit Robert 1*, p.2094.

(18) *OECII*, pp.1828 - 1831にはネルヴァルが実際に行なった東方旅行と『東方紀行』で描かれた旅行の旅程の地図がのせられている。それによると，エジプトに関してはほとんど差異がない。田村毅　梅比良節子　丸山義博　村松定史編『年譜ジェラール・ド・ネルヴァル　作品・記事・書簡総目録』（平成4・5年度科学研究費補助金総合研究（A）研究成果報告書「フランス文学におけるパリ — 中世から現代まで」東京，1994，p.95によるとネルヴァルは1843年1月16日にエジプトのアレキサンドリアに到着する。そして2月7日にカイロに滞在し，5月2日にカイロから出発する。このカイロ滞在中のいつネルヴァルがピラミッドを訪問したかは今のところ明らかではない。エジプト滞在中のネ

ルヴァルの書簡として最も注目すべきものは本文でも引用した1843年5月2日（推定）にカイロからテオフィル・ゴーチエに宛てて出した手紙である。ピラミッドについて言及していても，訪問の事実や詳細な描写が何もない。（Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome I, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Christine Bomboir, Jacques Bony, Michel Brix, Jean Céard, Lieven D'Hulst, Jean-Luc Steinmetz et Jean Ziegler et avec le concours de Pierre Enckell et d'Antonia Fonyi, Paris, Gallimard, coll.《Bibliothèque de la Pléiade》, 1989, pp.1395 - 1397. 以下この巻を *OECI* と略す。）それ故プレイヤッド版の編者が作成した2枚の地図のうち，ネルヴァルが実際に行なった東方旅行の地図にはピラミッドがないのに，『東方紀行』で描かれた旅行の地図にはピラミッドが記載されているのであろうと考えられる。

(19) *OECI*, p.1391. ネルヴァルの1840年10月～1843年5月の書簡を訳す際，『ネルヴァル全集III　東方の幻』（すでに引用した巻）に収録された朝比奈美知子・井村實名子・田村毅・藤田衆・丸山義博・村松定史　訳「書簡」を参考にした。

(20) *OECII*, p.305

(21) *Égypte*, p.318.

(22) *OECII*, p.272.

(23) *OECII*, pp.1828 - 1831によると，実際の東方旅行では行きも帰りもマルセイユを通過している。しかし『東方紀行』ではマルセイユに関する記述はない。

(24) *OECII*, p.282.

(25) 田村毅　梅比良節子　丸山義博　村松定史　編『年譜ジェラール・ド・ネルヴァル　作品・記事・書簡総目録』pp.95 - 97.

(26) 「『東方紀行』における都市（1）— ベイルートの城塞都市 —」『筑紫女学園短期大学紀要』第30号（1995年1月）pp.59 - 78において，ネルヴァルがベイルートで居住した家の描写をする時にマルセイユ周辺の小別荘と比較したことを言及した。

(27) *OECII*, p.272.

(28) 木島安史『カイロの邸宅 — アラビアンナイトの世界』（建築巡礼　14），東京，丸善，平成2年，p.104.

(29) 間瀬玲子「『東方紀行』における都市（5）— コンスタンチノープル —」『筑紫女学園短期大学紀要』第34号（1999年1月），pp.1 - 19においてコンスタンチノープルにあるジェノヴァ人の居住地であるガラタ地区について論じた。ネルヴァルは東方旅行を行なう前に旅行先の国々について詳細な研究を行なった

とされているので，イタリアの都市と中近東との関係を知っていたと考えられる。

(30) *OECII*, p.327.

(31) *OECII*, p.274.

(32) *OECI*, p.1391.

(33) *OECII*, p.1469.

(34) *Égypte*, p.284.

(35) *OECII*, p.343.

(36) Jean-Pierre Richard, *Poésie et profondeur*, p.17.

(37) *OECI*, p.1395.

(38) *OECII*, p.262.

(39) *OECII*, p.396.

付記　本論文は，平成13年度筑紫女学園大学・筑紫女学園短期大学特別研究助成金（一般研究助成）により遂行された研究の一部を公表したものである。